

『放浪者』について

植 木 利 彦

岡山理科大学教養部

昭和55年9月29日受理

個人と社会の関連性という問題は、コンラッドが作家となった当初から晩年に至るまで常に彼を虜にしてきた主要な問題であった。時にはリングード(Captain Lingard)やジム(Jim)、ノストローモ(Nostromo)のように個人的な夢想の世界における自己の理想像を現実の社会において実現しようとした男達、また、ヘイスト(Heyst)、ラズモフ(Razumov)やバーロック(Verloc)のように現実社会から逃避しながら自分の行動を観念的に正当化しようとした男達もいた。彼等に共通する点は、積極的であれ、消極的であれ、現実社会との関りにおいて、常に自己中心的な考え方や行動が多分に見うけられるのである。その結果、彼等は、愛する者を亡くしたり、自らの生命を落したり、あるいは自己の世界の崩壊を目の当りに見るといった、ある意味において、自己の性格的欠点に起因する苦い人生経験を味わった人物である。

『放浪者』におけるペロール(Peyrol)は、先に述べた人物とは一風かわった人物であり、コンラッドの作出した人物の中では最も現実的、中庸を心得た人物であると思われる。そこで、この小論ではペロールなる人物に視点を置き、コンラッドの個人と社会に対する考え方を、そして革命についての考え方を考察してみたい。

I

ペロールが優れた船乗りであるということは、英国の拿捕船を英国海軍の追手を避けながら無事にツーロン(Toulon)港に回送したことで明らかであるが、かつては旧フランス海軍の脱走兵であるらしく、その後は海賊紛いの海上生活を送り、声を大にして明言できないようないろいろな経験を積重ねた人物だけに彼の人生に対する考え方というものは、非感傷的な責任感をもって、現実自らを順応させていくことである。彼の強さは必然性によって支えられた判断に基づいて生きてきたところに存するように思われる。彼はどのような社会にあっても生きる術を心得た人物であるが、もしこの彼に社会人としての資格に欠けているものがあるとするならば、それは家庭人としての資格であろう。すなわち、人を愛し、一つの集団を存続させる意志であろう。彼は“The Brothers of the Coast”と呼ばれる海賊まがいの社会にあって、仲間と協力しあって生きてはきたが、その社会は愛に支えられた発展的な社会ではなく、天涯孤独な彼のような人間が生きていくための

み協力し、闘争を繰返している思想も理念もないその日暮らしの闘争集団に過ぎないのである。言わば、ペロールは植物界でいう一年草のような存在であっても、多年草的な永続性を持たぬ人物なのである。

このペロールが、『放浪者』の主要な舞台であるエスカンポバル(Escampobar)農場に海を捨てて現われるのであるが、このエスカンポバル農場そのものが世間から隔離された崩びゆく孤独な人間の世界を象徴しているのである。すなわち、エスカンポバル農場は、革命以前、この地方の資産家であったアルレット(Arlette)の両親が住まっていた屋敷であり、当時よりこの家族と屋敷は、村人の生活や住居とは距離の離れた存在であった。それ故にアルレットの叔母、カトリーヌ(Catherine)は娘時代に村の若者とも接触できず、妻のある牧師に恋をし村人の中傷的となって以来、この農場にひっそりと人目を避けて余生を生きて来たのである。革命騒動後、この農場に居座わっているセヴォーラ(Scevola)も革命前は村人の笑い者であったが、革命騒動当時、過激派の一員として彼は恐れられはしたものの、革命後は革命騒動中の彼の余りにも過激な行動ゆえに村人より「死神」のように嫌悪され、彼の行動や意見への同調者もなく、村人から仲間外れとなってこの農場に潜んでいるのである。また、アルレットも革命騒動の最中、目前で両親が惨殺される異常な光景を目撃し、セヴォーラによって狂気じみた騒動の渦に巻き込まれ、精神的異常をきたしエスカンポバル農場にセヴォーラと共に帰ってきたのであるが、彼女もまた世間の人々より、過激派セヴォーラに自らをそして農場を売り渡した過激主義者と看做されているのである。

エスカンポバル農場は正しく世間とは何の繋がりも持たぬ孤独な人々が寄り集まって生きている世間から遊離した避難場所なのである。しかもこの住人であるアルレット、カトリーヌそしてセヴォーラの三人の間にも何ら暖かい精神的な繋がりには存在しないのである。アルレットとカトリーヌは姪と叔母であっても、精神的に何も感ずることの出来ないアルレットとセヴォーラが結婚すると断言してはばからぬアルレットの将来を気づかうカトリーヌの精神的苦悩の間には一方的な流れがあるのみで、相互の理解は存在しないのである。このような精神的な繋がりがない三人の人間が住まう農場に、彼等と同様、孤独なペロールが現われるのであるが、彼という人間を媒介としてこの農場にも新しい人間関係が生まれるのである。

全く孤独な世間との繋がりを持った一人者が寄り集まったエスカンポバル農場において、各々の人間がペロールという人間と何らかの形において、精神的な繋がりを持つことによって他の世界との関係を拡大しているのである。ペロールはこの農場での人間関係の核であり、彼を通して各々が新しい世界への道を模索するのである。具体的に個々人を例にとってみれば、アルレットにとってペロールは彼女と同じように子供の頃この地方に住み、幼くして孤児になった点において共通したものを感じると同時にがっちりとした体格と胡麻塩頭、その落ち着いた態度は信頼できる父親的存在として彼女の目に写っているので

ある。ペロールに対する感情をきっかけとして、アルレットは正常な感性と理性を回復し、レアール (Réal) に対して女性としての感情を抱き、社会復帰を果たすのであるが、その過程は赤子から一気に成人の感情への移行のようである。

尼僧のような汚れを知らぬカトリーヌにしても、その生き方は余りにも過激な潔癖主義であり、エスカンポバル農場でセヴォーラの凶暴さの暴発を恐れ、革命騒動の流血の中に身を晒したアルレットへの神の怒りを恐れて日々を送っている、それは何の問題解決にもならないのであるが、ペロールは彼女にとって、彼女とアルレットをセヴォーラという暴漢から守ってくれる犬のような存在として無意識のうちに感じとられているのである。そしてペロールにアルレットやセヴォーラのことを打ち明けたからこそ、ペロールによってセヴォーラという「死神」を取除かれたのである。

セヴォーラにとっては、ペロールはその過去の生活の中で幾人かの人間を手にかけてたり、死体を海中に投げ捨たり、イギリス海軍と戦った点からみて、革命的過激主義者と考えられ、彼の同調者と思われたのである。しかしながら、セヴォーラの見方からすれば、ペロールの行動は彼の行動と同質のものであろうが、ペロールの行動は個人的な主義主張や人間愛のために人を殺したり、物を奪ったのではなく (When he robbed or killed it was not in the name of the sacred revolutionary principles or for the love of humanity.¹⁾), それが彼が生きていく手段であり、そうせざるをえなかったからなのである。一方、セヴォーラの行動は革命という時代の渦の中で、普通の有産階級に対する不平不満の現われであり、常に彼を爪弾きしてきた世間への復讐のような形でなされた凶暴な行為に過ぎないのである。彼には革命理論や革命後の展望については何もないのであり、ただ破壊することと王党派の人々を惨殺することのみが目的なのである。従って彼は革命家ではなく、暴力的虚無主義者なのである。彼のこのような暴力的虚無主義が新しい体制ができた時に大衆から嫌われる要因となっているのである。彼はペロールとの交流において、その点を看破されてペロールが守ろうとする小さな世界から抹殺されるのである。

有産階級の出であり、アルレットと同じく革命騒動によって両親を処刑で無くし、その後、自らに厳しい自制を科し、友人を作らず、感情に動かされることを極度に嫌い (…a man who on emerging from boyhood had laid for himself a rigidly straight line of conduct amongst the unbridled passions and the clamouring falsehoods of revolution which seemed to have destroyed in him all capacity for the softer emotions.²⁾), 己の精神的な強さを自惚れ、アルレットを “body without mind” と軽蔑してはいるものの、考えてみれば、人間的な感情を全く押殺したレアールの生き方は余りの極端さ故に異常とも言えるのであり、一つの考えに凝固まった熱狂的な革命主義者と変わるところはないのであり、彼は『放浪者』の中の登場人物達の中では最も革命家に類似した性格の持主であるといえる。その彼がペロールにフランス海軍をツーロン港から脱出させなければならぬ彼の難しい任務を打明けたのは、ペロールが単に船乗りであったという事実だけでは

なくて、ペロールが一切革命とは何の繋がりもなかったこと (the only man who had nothing to do with the revolution—who had not even seen it at work.³⁾), そしてペロールの生き方が彼の生き方とは対照的で、自由奔放であり、それでいて彼の実直で利巧な人間的魅力がレアールに初めて他人に対して心を開かせたのである。レアールがペロールに心を打明け協力を求めた結果として、ペロールの大胆なレアールを裏切るような行為によって、フランス海軍をツーロン港より脱出させアルレットとの新しい生活を手中に入れたのである。

人間は、一人よがりの考えに固執している限り、それは問題解決とはならないだろうし、助けの手も差伸べられないのである。他人との対話、協力、理解が総ての問題解決の糸口を与えるものなのである。こうしたコンラッドの考え方は、ペロールが例えそれが海賊まがいの集団であれ、互いが協力しあい、リーダーを定めることによって、幾度となく危機を潜抜けてきたことや、ペロールの三角帆船を海におろす際に、身体的には不具者であるが、村人を一致協力させて見事な指揮振りを発揮した男に対しペロールが “I tell you that there is that in you which would make a chum one would like to have alongside one in a tight place”⁴⁾ と述べるところに表明されているのである。そしてこの他人との協力と連帯の大切さは、ペロールが冗談まがいにカトリーヌにいう “You ought to have been married”⁵⁾ という言葉に象徴されているのである。エスカンポバール農場に関わる総ての人間は、セヴォーラを除き、ペロールを通じて新しい世界に門出したのであるが、ペロール自身も一時はアルレットに対する愛、アルレットのレアールを愛する気持ちに対する嫉妬心から、フランスが彼のような優れた船乗りを要求している時に、その要求を蹴ろうとした偏狭な考え方に陥ったこともあった。しかしアルレットの必死な叫び声が、彼に自己中心的な考え方からより大きな彼のそして彼の愛する人々がいるエスカンポバール家の将来を、フランスの将来を考えさせ、セヴォーラやレアールと同じような利己的な狭い世界に閉込めようとした彼を開放したのである。従って彼の行動は、狭量な世界に閉込めようとした彼の精神的弱さに対する彼自身の挑戦であり、同時に人は、自己中心的に考え生きるのでなく、常に自分を取巻く世界の中であって、他人との協力、理解に心掛け生きていくことが新しい生命を生み、社会を持続、発展させられるということを身をもって示したものである。

一年草的存在のペロールが多年草的な考え方を身をもって示したことは、コンラッドが個人と社会の繋がりにおいて、永続性というものをいかに大切に考えていたかの現われであり、社会を永続させる要因は社会を構成する他の構成員との協調性であり、偏狭な観念ではなく、中庸を心得た柔軟な理性にあると主張している。

II

幼なくしてフランスを去ったペロールは王党派でもなければ、革命派でもなく、むしろコスモポリタンの人物であるが故に何の偏見も持たずにフランス革命の本質を理解しえる人物であるといえるだろう。彼は新生フランスに帰還したのであるが、そのフランスが革命前のフランスであったとしても、やはり彼は祖国を愛していたことだろう。何故ならフランスが彼の祖国であることには変わりはなく、革命はフランス人の人間の本質を変えるのではないからである。革命によって何らかの変化があるとすれば、それは政治体制に対する人間の観念的变化にすぎないのである。換言すれば、革命が人間を変えるのではなく、人間の政治体制に対する観念的变化が革命をもたらすのである。しかしながら、社会が変化する時代には、必ず既成社会の価値観の急激な変化を望む極論を唱える不満分子や、何も分からぬままに革命熱に浮かされる軽薄者が世に現われる。彼等は一見革命的過激主義者のように見えるのだが、これには二種類のタイプがある。すなわち、『西洋人の眼の下に』のハルディンのように過激な行動に走りながらも、社会に対する鋭い批判力を持ち、来たるべき未来に希望を繋ぐ純粋に革命的な人物と、もうひとつは、『放浪者』のセヴォーラや、『密偵』の教授のように無差別に人を殺りくし、物を破壊するのみで明確な政治理念もない過激な破壊主義者である。後者の行動は革命という名のもとになされる個人的な欲求を満足させる狂気じみた自己顕示欲にすぎない。

コンラッドにとっては、いずれのタイプにせよ、こうした過激主義者は秩序ある社会にとって何ら貢献するところはないのである。ちなみに『放浪者』を考察してみる時、セヴォーラは、その過激な行動によって多くの王党派の人物を殺害し、アルレットを精神異常の状態に追いやり、カトリーヌの絶えぬ不安の種となっているのである。彼はその行為によって社会に貢献し、受入れられるどころか、むしろ世間の人々によりその残虐行為と浅はかな思慮の故に嫌悪され、排斥されているのである。すなわち、彼等、過激主義者達の行為から生ずるものは、社会秩序の崩壊と不毛の世界の拡大だけである。革命家や革命に乗ずる人物達の生臭い行動は、生きるがために生死をかけなければならない必然性に基づく行動ではなく、自己の行為を正当化しえるような大義名分をかかげ、自己の主義、主張の誇示のために大衆を犠牲にして、政権争奪闘争行為に参加しているという自己陶酔的行為なのである。こうした連中は、ある意味において、革命気分を盛上がらせる旗振的存在であるが、他面、革命熱に踊らされた哀れな犠牲者ともいえるだろう。従って『放浪者』のペロールのセヴォーラに対する侮蔑感は、コンラッドの革命に名を借りて無思慮な行為に走る人物への侮蔑感である。

コンラッドにとってその運動の源が大衆にあっても、最終的には革命とは単なる政権を維持しようとする者と奪取しようとする者との争いそのものであって、必ずしも大衆の願望を満すものではないことは、『ノストローモ』等の作品において主張してきたところである。従ってコンラッドにとっては大衆が平和に暮らしていけさえすれば、どのような体

制であってもいいのである。何故ならコンラッドはロシアの専制政治を強く嫌うと同時に、過激な革命家に対しても辛辣な描写を多くの作品でしているのであるが、それは大衆を巻込んだり、大衆の自由を認めない、革命騒動や専制政治を憎んでいるのであってその国の大衆を憎んでいるからではないのである。その証拠にナポレオン帝政下のフランスと、そのフランスと戦っている王政を敷く英国の両方に深い敬愛の念を示しているのは、この両国が国民の自由を大幅に認めているからである。コンラッドは、ペロールやイギリス海軍の艦長の口から敵国であるイギリスやフランスの国民の勇気や才気を誉め称え、戦争をおこすのは国民ではなく、政治にたずさわる人間の極端で狭量な政治観念であることを指摘している。

個人にしる、国家にしる、極端な行為や考え方というものは、物事の一面のみを過度に強調しているのであり、調和のとれた判断力を欠いていることに他ならないのである。その例が、前に述べたセヴォーラとレアールである。レアールの極端な自制を強いる態度は、一見異常であるが、逆から考えてみれば、軍人にとってそうした己に対する厳しい態度は望ましいことであり、またそうするように訓練されたのであろうが、ペロール、すなわちコンラッドは、そうとは解釈していないのである。友人も知人も作らず、愛され、愛しているアルレットの心情や幸福を顧みることもなく、感情に引かれることが己の信条に反することであると考え、死にも等しい任務を引受け、彼女の愛を棄て去ろうとするレアールの態度は、一つの理念のみに心酔する浪漫的な熱狂主義者と変わるところがないのである。軍人としての、また己の信条に対する狂信的なレアールには、人間が本質的に備えている理性や感情等を多面的に理解しようとする人間的な幅が備わっていないのである。そこにペロールの超保守的な過激主義者といえる軍人に対する嫌悪感が存するのである。

It is impossible to work with people like that.⁶⁾

They would cram a fellow's head with notions either for their own sake or for the sake of the service.⁷⁾

過激主義が、この世に生み出すものはレアールやアルレット、セヴォーラやカトリーヌといった非協調的、非生産的な人物や、戦争であり、更に宗教活動の全面禁止といった人類にとって太古より維持されてきた絶対必要な制度の破壊等である。しかし、常に人類を国家をこの世に継続的に存在させ、必要な制度を残してきたのは、政治や戦争とは直接関わることなく、それらの影響を強く受けながらも地道に生きてきた大衆なのである。

III

コンラッドが多くの作品で主張してきたように、社会からの逃避や、社会との対立は人間を孤独な世界に追込んでいき、ひいては個人的な独断を絶対的、普遍的な真理と見誤り、自己破滅へと進んでいく場合が非常に多いのである。このような誤りを避ける道は、常に世間との接触を保ち、人間的絆を強化し、他人との協力、理解を深め、社会との連帯感を

維持していくことである。それが自分の生存する社会を認識することになるのである。個々人が依存している社会は一朝一夕にしてできたものではなく、歴史的必然性を経て、我々人間にとって矛盾や不条理をある程度包含しながらも、生活していくのに都合よく変革されてきたのである。従って社会とは、人間が生活していく集団であって、その中心をなすものは大衆なのである。存在する社会体制に強い不満を持つ者や、政治権力の座を狙う一部の者が革命という名のもとに極端な行動にでることは、存在する社会を動乱の渦に巻き込み、大衆に多大の被害を及ぼすのである。そしてその被害は、単に物質的なものにとどまらず、社会における人間関係にも影響を及ぼし、人間が互に疑心暗鬼となり、相互に不信感をつのらせるのである。換言すれば、革命や極端な考え方、行動は、人間を精神的不具者に追込み、調和のとれた人間性の発展の妨げとなり、人間的絆を断切って、不毛の社会の出現を可能ならしめるのである。従って社会に生存する者は、長い歴史をもつ社会を維持していくために、常に社会との連帯を強め、社会が、保守的であろうが革進的であろうが、一部の極端な考え方や行為にでる者によって揺り動かされないように守っていく愛護心を養い、現存する社会の現状維持のみに固執することなく、社会の旧弊を漸進的に改革していく新取的気概を持たなくてはならないのである。

Notes

- 1) Joseph Conrad, *The Rover*, (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1971), p. 209.
- 2) *Idid.*, p. 209.
- 3) *Idid.*, p. 209.
- 4) *Idid.*, p. 98.
- 5) *Idid.*, p. 235.
- 6) *Idid.*, p. 230.
- 7) *Idid.*, p. 232.

On The Rover

Toshihiko UEKI

*Department of General Education,
Okayama University of Science
Ridai-cho, Okayama 700, Japan*

(Received September 29, 1980)

The relation between a man and society is one of the most important themes in Joseph Conrad's works. For him, society is originally a place for man to live and has been improved little by little, in accordance with historical necessities, to be suitable for man to live, even if it includes some kinds of contradictions, irrationalities and absurdities. So people must protect their society from excessively conservative politicians who are inclined to be despotic, and radical revolutionists and destructive nihilists who want to destroy and disorder the existing society.

In this thesis, I want to examine Conrad's thoughts on what and how we should think and behave to protect our society through his work *The Rover*.